

オリーブの樹

第105号

2011年5月22日

شجرة الزيتون

早期積放！重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！

総身に
怒り哀しみ
抱き取りて
三陸の棧ほち
満身で
咲く



目次

- P 2 リッダ闘争の39年目 重信房子
- P 4 3月4月の歌 重信房子
- P 5 独居より 重信房子
- P14 ずっとウソだった 辻邦
- P15 高知から東京へ 唐一
- P16 アラブ物語(15)ーシンガポール・クウェート作戦の時代ーアジア連帯(1)

重信房子さんを支える会

リッダ闘争 39年目を迎えて

重信 房子

リッダ闘争から39年目のナクバの5月を迎えています。

今燃えあがるアラブ民衆蜂起の系譜を辿り、リッダ闘争の熱い民衆の声を思い返しています。

39年前、リッダ闘争の時代のパレスチナアラブ戦場は、「パレスチナ解放！ 人民戦争によってパレスチナ全土解放を！」、「イスラエルの国家テロを許すな！」と、民衆の憤怒と連帯に湧き上がっていました。

パレスチナの住民の参加も決定権もなしに「決定された」「パレスチナ分割」の1947年。それからイルグン、ハガナらのユダヤ人シオニストのテロ機関によって虐殺・追放されたパレスチナの人びと。67年には米国の支援によって一方的にパレスチナ全土を強奪・占領したイスラエルは、シリア領ゴラン高原・エジプト領シナイ半島をも奪ったのです。

もはや国連やアラブ諸国政府を頼っている自らの家族の命も故郷も守ることはできない、自らの運命を自らの力でやり拓きパレスチナ祖国を解放するのだ！ 67年の戦争を直視し、パレスチナ解放勢力は自らを組織し、「PLO」パレスチナ解放機構を変革しました。そして武装闘争を最良の闘争形態と規定し、人民戦争戦略によってパレスチナ全土を解放すると宣言しました。占領されたパレスチナを囲む国境地帯からのゲリラ戦の闘いに加えて、国際遊撃戦としてイスラエル・シオニズムに対する闘いを採用しました。

リッダ闘争もまたそうした闘いの一角として担われました。

こうした闘いは、長い間、反植民地闘争を闘いぬいてきた民衆の圧倒的支持支援につらなる闘いであつたのです。「イスラエル建国」は、アラブ民衆にはどうも受け入れることのできない不正義であり、反イスラエルを立場として政権もまた対峙してきました。

しかしイスラエルとの戦争の継続はアラブの豊かな歴史と文化にもとづく建国を困難にし、「軍事国家」として軍人が建国のヘゲモニーを持たざるをえず、ことにきびしい地下戦争は対スパイ治安・安全保障第一の国づくりとして、軍人指導部の特権が育つ構造が深まりました。当時の冷戦下、イスラエルと反ソ反共同盟下にある米国と対峙したソ連東欧は、アラブ諸国を武器・情報で支援し友好を結びました。それはまたボルシェヴィキ型の一党独裁権力による政権維持を育てるきっかけにもなりました。

アラブの民衆は、「イスラエル建国」によって不当な状況にあるパレスチナ解放を支援しつつ、しかし「反イスラエル」の名において政治的自由を抑圧する自国の軍事政権の改善を求めてきました。リッダ闘争に対して国家・民衆一体となって熱狂的に支持した姿は、公正なパレスチナの解決に向けて闘う限り民衆も政府も一つになってすすむ力を持っている姿でした。こうした闘いを経て74年、パレスチナは国際社会に正当なパレスチナ建国主体として認められていきました。

あのリッダ闘争から39年、パレスチナ指導部を含むアラブの諸政権は、反イスラエルの闘いよりも、ことにソ連東欧崩壊後の困難の中で「政権維持」を優先し、民衆の要求を抑圧してきました。ある国では、かつて自分たちが倒した王様のように人民の富を独占し、再配分を民衆に返そうとしませ

んでした。民衆の怒りは臨界状態にあつたといえるでしょう。

イスラエル・アメリカは反体制勢力を自らの利益のために支援し、親米政権勢力の拡大に向けて国際機関を動員して民衆蜂起に介入しています。とくにイランやシリアには力を注ぎ、「イスラエルの安全」をめざしています。しかしアラブ民衆は、イスラエルに対する公正な裁き、被占領地の返還、パレスチナ問題の解決抜きには、米国やイスラエル・シオニストの夢想を許さないでしょう。ウサマ・ビンラディンの虐殺もまた無法なアメリカの本性を示すがゆえに、アラブの民衆はウサマ・ビンラディンらの反対者であっても怒りを持つでしょう。

こうした民衆の変革を求める羅針盤のように、パレスチナ解放闘争は今、解放勢力の分裂から統一したパレスチナの再生を宣言しています。パレスチナ解放闘争はアラブ民衆の闘いの反面教師でもありました。今、アラブパレスチナの民衆の蜂起の希望を反映し、統一した民主的なパレスチナ解放・建国へと歩を進めようとしています。利権特権に立つパレスチナ指導部の一部は米国の支援を受けて、希望の再生の闘いに死力を尽くして対決するかもしれません。しかしパレスチナアラブ民衆の願は公正なイスラエルへの裁きと共に富の再配分を含む民主化を求めています。

リッダ闘争の闘いに湧きあがった民衆の声は、統一パレスチナによる祖国解放とパレスチナ建国として、今、よりきびしい一歩を歩きはじめています。このリッダ闘争の39年目に、アラブ民衆の羅針盤として、パレスチナの闘いが育つことを願ってやみません。

それはまた、3・11大震災によって新しい時代を迎えた日本の再生とつながっています。人災フクシマ原発から平和日本への徹底、脱原発、核も基地も不要な再生日本の道です。それは国民住民主権の力を各地に育て結び合う平和と公正の国際社会への貢献の道でもあります。

新しい時代を創る人びとと共に！ パレスチナに連帯！

5月8日記



アッバス大統領（左）はガザをコントロールするハマスとの和解協定に署名した。

三月四月の歌

三・一 一 変わる祖国の兆し見る反原発の若人の群れ
黙禱より始まる子らの新学期桜吹雪の哀しかりけり

被災地に寄せる善意のあまたある市井の人の意志こそ祖国に

灌仏会花御堂に向きて立ち被災の人らに祈り捧げむ

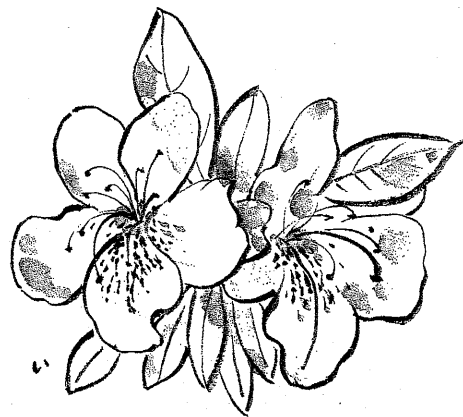
雪が降る宮古の老婆の方言の感謝の一言哀しみとなる

大津波去りし瓦礫の泥道にランドセル一つ老婆が独り

海静か生命の奇跡祈る背に陸前高田の白梅ひらく

女性の日ミモザのかんむり手をつなぎ友とパレードベルリンの街

ムスカリの咲き初む街は暖かく生まれ来し吾子に乳房をひらく



独居より 3月28日~5月16日

「がんばれ日本！」より「変えよう日本！」です

重信 房子

3月28日 今日、東京の桜は開花したというけれど、寒いし、毎日届く新聞に怒りと涙。怒りは人災に、涙は天災の中生きる人々。

今日は第5クールの抗ガン剤ゼローダが朝までで休業に入る日です。

朝採血。午後には診察。担当医が今朝の血液検査結果を見ながら、「骨髄抑制で、骨髄機能がずいぶん低下しています。3月22日から5日間白血球が減少したのでノイトロジン皮下注射を行ったが3,790で、前回注射で10,260まで上がったが、かなり低い。今日もう一回皮下注射して来週(月)からの第6クールがやれるかどうか検討したい。また末梢神経障害についても、膝やかかとを「かけ」の時のようにトンカチみたいなので叩いたけれど反射反応なく、これも機能低下。Dr.は点滴エルプラット(オキサリプラチンが主)の量もへらし、ゼローダの量もへらして、副作用に体力がまいってしまわないように検討すること。また休業期間1週間を白血球量戻らなければ、2週間にすることも検討すること。

免疫低下に気をつけるように言われつつ、運動のベランダに行くと、プランター2つに4株ずつパンジー満開! ずっと体調悪くて運動休んでいる間に、パンジー1株に11の花をつけて大きく咲いていてうれしくなりました。

お便り、カンパ、ダウンロード資料、週刊誌その他たくさん感謝。

3月30日 パレスチナ土地の日。今もますます激しくなるイスラエルの土地占領と住民追放の民族浄化政策の中、闘っている人々を思い、東日本震災の人々を思いつつ。

今日は運動場へ。外の運動場を囲む桜並木、もうつぼみがこぼれそうにふくらんでいました。あきずに眺めていて春のような暖かい日。再びガンの手術をして成功したことをちょうど昨日伝えてくれた親愛なる友を思いつつ、祈りました。命の限り変革を求める友人の、生命力バイタリティに私も励まされています。

今日はリッダ闘争の仲間、檜森孝雄さんの命日。合掌。

4月1日 八王子はまだ寒くて、今日も朝に1時間の暖房が入るほどです。それでも昨日まででカイロ、保

温下着の使用は終りです。カイロは回収、保温下着は私物保管の箱の中へ。寒くても休業期間中食欲もあり、今朝は完食!(といってもごはんのみそ汁ときゅうり漬け4切れに缶詰肉少々。)元気です。

「4月11日観桜会に参加しますか?」というので、「します!」と答えました。春に向かって何か力が湧いてきます。

夕方告知放送で東日本震災に対して、八王子のこの施設からも被災地の矯正施設への支援として非常食、毛布、簡易トイレなどの物資を送ったとのこと。また矯正施設外にも支援し喜ばれたとのこと。そしてこの国家的緊急時、節水など一人一人のできることに取り組むようにと放送されました。被災者の支援が人災悪循環の原発事故でままならないようで、毎日新聞見ては怒りつつ胸を痛めています。

4月2日 週末。今日は友人たちの「土地の日」の集いと聞いています。どうでしょう。

南側の塀の外に白梅がまだいくつか花を残した上方の桜並木の1本が咲きました! えんじ色の幾重もの重なった枝の中にぽつりぽつりと白い花がこぼれました。昼過ぎには一分咲き! オナガが何羽もその枝をゆすって楽しんでいるよう。グラウンドへ上がる土手の上に黄水仙一株が咲いているのを発見! 春、八王子はこれから美しい時です。そんな日、一昨年夫を亡くした友人から、夫が植え残してくれた野すみれが咲いたと、写真と一首。春をまた一つもらいました。

4月4日 朝採血。運動に出ると良い気持。終るとDr.が診察を待っていました。「悪い知らせですが、今朝の採血、白血球は上がってはず2,800、好中球は18%で、第6クールの治療には入れません。今日から5日間ノイトロジン皮下注射で白血球上がるまで待ち、4月11日に再検査してから第6クールを決めましょう」とのこと。本人食欲もあり元気なのに骨髄機能が悪化低下しているとのこと。

夕方弁護士に頼んでいた押収物還付請求書のコピー受取りました感謝。

Tさんの暖かい励ましの手紙のあと、今日はHさんよりお便り。11月20日のガッサン・カナファーニ朗読劇、「太陽の男」上映会、メイの大学院学位論文発表会、3月6日の集いにTさんの再手術成功、それぞ

オリーブの樹 第105号

れ写真入りでくわしく知らせてくれました。この間のこととてもよくわかります、感謝。Tさん笑顔、M、Hさんら「さわさわ」のみんなの笑顔にホッ！それにしてもTさんのこれからの生命力に連帯！私も治さなくちゃと心新たに。

資料、お便り、それに「オリーブの樹」104号も今手元に夕方届きました。感謝。Rさんの遊び心、広がる心が感じられる絵にニンマリ。感謝。きっと選挙や地震対策や仕事も多忙のところありがとうございます。辻邦さんの「絶対」の嘘」本当に。

双葉町大熊町ののどかで美しかった景色。思いやり深い住民を思い出しつつ、「安全神話」を信じ、また広報したという自責の念にとらわれず、住民こそ人災を怒り告発し、そして未来の「原発と違う道を歩むフクシマ」が日本の誇りとなるよう再生してほしい。岩手宮城の人々と共に。

桜は早くも1本三分咲き。他はまだ未開花。八王子のいいところ伝えたい春！

4月5日 今日は旧暦で清明。春なのに八王子は今日も最低温度は0の予想で、朝に暖房が1時間入りました。塀の外は桜並木がいつせいに開きはじめています。1本はもう五分咲き以上！小さい金網と鉄棒越しの窓から首を伸ばして見るたびに、きらきらと花が増えています。

今日は35信を出したあとで、押収品還付請求書の訂正など朝からバタバタと準備。担当の方の協力で「文無し封書」を発信してホッ。(手紙入れないなら、発信枠外で発送してくれる。)運動をとりやめて作業のあと入浴。

午後には皮下注射。今のところ「休業期間」の延長状態となつて、食欲もあり元気ですが白血球が足りない。今週いっぱい注射でなんとか白血球をふやして、来週には第6クールの治療に入れるといいのですが……。

福島第一原発の放射能汚染水を海に放出。「より大きな被害を防ぐ為の相対的な措置」(枝野官房長官)と言い放っている。「低レベルの汚染水」というけど「低レベル」とは考えられないし、影は解明できてもない。東電、原子力安全委や経済産業省など「安全神話」のコーラスをくり返してきた人々の無責任は、結局現場を知る作業員技術者の後追いばかりの「想定外」口実。この人々が原子力安全神話の広告に巨費を投じて現場の改善要求は二の次にしてきた人々です。人事一新して、国際国内の知恵や原発の立場の人々にも学び、加えて解決策を集めるべきだと思う。「人災」をきっちり正さないと天災も治められない状態です。

4月6日 もう塀の外は八分咲きの樹が1本。でも塀の中はまだです。今日はペランダの運動。銃眼のような小さい隙間から見ると、診察棟の方に1本桜満開！「あ咲いている！ほら！」運動していた3人で、遠い桜に見とれてペチャクチャと楽しい春日和。夕方友人から京都旅行の話と、他の一家からは1歳2歳の子を連れて東京脱出京都へと。驚き。「がんばれ日本」より「変えよう日本！」です。

4月7日 塀沿いの外の桜並木はあつという間に満開です。薄桃色の花が大木を染めあげています。それに私の小さい窓から直線で15メートルくらいのグラウンドへの土手の上に、枝垂れ桜が数日前から咲きはじめました！目線のちょうど先、冬木立の枯れ枝が枝垂れた先に濃いピンクの色を増した時には嬉しい驚きでした。何度も窓辺に寄っては花を眺めています。

今日は午後から灌仏会。どんなものかと楽しみです。2:00-3:00です。私たちは講堂に集まりました。2時ちょうどに4人の有髪の導師が入室。職員(司会)の開会宣言のあと、4人は一礼してしつらえた斎壇の前に立ってお経を唱えはじめました。3人が袈裟がけ、1人はかけていず、黒い僧侶の着物です。唱導師の声響きわたる中、まず男性受刑者3人ずつ、小さいテーブルに置かれた花御堂の前まで行って、お釈迦様に甘茶をかけて祈ります。順次男性が終ると、後方の一角の女性たちの方へ、花御堂を職員たちが急いで運んできてテーブルの上に置きました。そして女性は1人ずつ甘茶をかけて祈り、ちょうどそれが終わったあとに4人の導師のお経も終わりました。その後一番年寄りの僧侶の着物の方が法話。「天上天下唯我独尊」とは何かを話してくださいました。

この「我」とは「求道する心。魂、生命」の意味であり、どんな境遇下でも自ら道を求めて生きる尊さというのだと説かれました。ただマイクの音が小さく、ほとんど聞きとれず残念でした。

夕方にはKやMさん他友人たちからのお便り。感謝。Kは震災被災地の卒業式で、15歳の少年が涙で絶句しつつ語った「この現実を受けとめ前に進むしかない」ということばを落涙で夫婦で聞いたとのこと。土曜日4月2日停電で延期しようとしたけど多くの方が集まったとのこと。被災地のこと、原発のことさまざま語り合い、「9条改憲阻止の会」の被災地福島いわき市の老人センターへの救援に協力して「明大土曜会」としてカンパ支援を行うことにしたとのこと。土曜会のヒューマンズムの基本方針に合致したタイムリーな動き、うれしくKの手紙読みました。

またMさんからは3月25日関西の「3・30土地

の日連帯企画アラブ民衆蜂起とパレスチナ解放・報告と講演会」は、なかなか面白かったと伝えてくれました。そしてまた4月3日恒例の大阪拘置所花見行動夜回り行動など、関西の元気をありがとう。

4月8日 満開の花。強い風に桜並木はゆさゆさ揺れ、枝垂れ桜の枝をふりまわしているのに、花を散らさず咲き誇っています。咲く時も散る時も自分が決める！という心意気を感じて、ますます見とれています。

今日は採血。5日間の皮下注射も終わる日です。白血球は増えたかな。4月11日(月)は観桜会。白血球が大丈夫なら参加OKとのこと。結果は週明け。

たくさんの資料ありがとう。4月3日に「獄中弾圧・獄中医療放棄と闘う共同集会」があったのですね。知らなかった。私もあいさつを送るべきでした。今後こうした集会のことは前もって知らせてくれるとうれしいです。「支える会」にもお願いします。資料から泉水さん、丸岡さん、磯江さん、星野さんらの資料を読み、知らずにいたこと申し訳ないです。他の多くの資料4月2日の東京の「土地の日」の集いの資料もありがとう。

4月10日 桜が窓から見えるというだけでこんなにも華やかな気分週末。花にみとれ、歌がうかび、心豊かな日々です。ちょうど抗ガン剤も体内から抜ける休業期間も長びいて食欲も盛んです。午後に枝垂れ桜の下の土手に黄色の点々の花、あ！タンポポ！桜に誘われて1、2、3……6つの花が咲きました。もう寒さにちぢこまらないでいい八王子です。

4月11日 桜日和。風もなく晴天。今日は観桜会。12:00-13:30までで、30分で桜の下で弁当を食べて、あとの1時間は写生会とのこと。何十年も写生はしたことないけど。官服に着替えて、プールのまわりの桜の大木の下へ。ちょうどプールを囲んで、男性たちがすでに座っていました。桜は見事で、ちょうどひらひらと、弁当にまで花びらを散らせています。とても気持ちよい花吹雪の下で。それから写生。エンピツで描いていたらどんどん紙面がエンピツで汚れたけれど楽しい一時。

戻るとすぐ診察。Dr.から「白血球は12,890と上昇したので、あさって(水)13日から第6クールを始めましょう」とのこと。でも4月4日の採血から、腫瘍マーカーCEAは13.6(前回16.4)と下がったけれど、CA19-9の方が361.0と極端に上昇(前回19.5)。両方のマーカーとも消化管のチェックだが、CA19-9のみ上がるのは肝ガンの可能性とのこと。Dr.は3月に肝

ガンマーカー(AFP)を測っていて、今回初めて知らせてくれたけど、10以下が正常のところ19.6だったとのこと！3月に言ってほしかった。肝機能数値も正常より高め少し。肝への転移か原発性の肝ガンか、それとも異常ないのか。今週14日にCT造影剤で画像でチェックしてもらうことにしました。順調に治る方向にあると思っていて肝ガン?! まあ来るものは来るし、天命のままに。

診察のあと夕食前、窓の外の満開の桜並木と枝垂れ桜をボーッと眺めていたら、突然の雷に雨。どこかで友が呼んでいる！あさってからの第6クール副作用をコントロールしつつ肝臓も大切にしくちや！

夕方、姉や友人たちのお便り。桜がそちらもきれいなのですね。八王子もよ！今日は大震災1ヶ月目。この施設の職員も受刑者も医者も全員2時46分に1時間の黙祷をしました。

石原都知事4選。民主党はますますやっぱり敗北。「変えよう日本」の声を更に。

4月13日 枝垂れ桜にみとれつつ起きる。いい春日和。今日は2週間ぶりの運動場で桜の下で30分!と思ったが、点滴で不可。10:25からエルプラットの点滴。今回はガイドラインで副作用のグレード3に私がいるとのことで(白血球の減少)、エルプラット190mgを130mgに。口経抗ガン剤ゼローダは1日8錠から6錠にへらしました。

点滴終わらないうちに処遇担当より告知。ベッドの上に寝ながら受けました。内容にびっくり。

「4/9のNさんの手紙によって、4月12日に新法128条により処分を決定。矯正処遇にふさわしくないと、今後、書信の発受を禁止する」とのこと！Nさんは何を書いたのでしょうか。60年代の旧友なのに。他の人の救援責任を負ってるせいかな？彼の内容を他の人も聞いて教訓にしてほしい、せつかくのありがたい通信が不許可となり、今後ずっと交信できず、そういう友人が増えるのは悲しい。N夫人、ひき続き雑誌資料、釣りやワンちゃんや図太いネコの話などは送ってください。夫人のパワーをお願いします。何だかがっかり。夕暮れの桜を見つつ。4月から職員も変わっていて、新しい方策なのかと気になります。

たくさんの資料感謝。ダウンロードの資料、弁護士からの連絡他「情況」も届きました。「選択」「紙の爆弾」や多くの資料これから大切に読みます。

4月14日 桜吹雪が朝からまるで砂漠の妖精の小さい蝶々が無数に舞うよう！目線の先の枝垂れ桜のピンクも白くなりひらひらと落下しはじめました。

昼食を遅らせて、午後 CT 撮影です。肝ガンの疑いのため。それでも微少転移は CT でも目視はむずかしいようです。撮影を終えて遅い昼食を取っている 2:00 近く、姉と義姉の面会。ちょうど 16 日の父の命日の八王子へ墓参り兼ねて、私の白血球減少を Dr. と面接して話を聞こうと来たのでした。すでに Dr. とは話をすませている、肝臓の方のマーカー上昇を心配してくれました。ちょうど関西の「さわさわ」の T さんが肝ガンで（2 年前には食道と胃のガンののち）手術をされて、4 月元気で退院と知ったところです。共に乗り越えてまだあれこれ変革に力を注ぎたいですね。

Y さんが「明大土曜会」の詳しい対話をドキュメンタリータッチで伝えてくださいました。被災の日話、気仙沼の T の話、みな辛く大変なのに心意気あって嬉しい。「明大土曜会」の震災カンパもこれからの会自身の力になりますね！

T さん、ショウショウバカマ旧暦清明の写真と歌感謝。こんな歌と共に「木の陰に二階の女がぼつねんと居らし街の風結ぶ夕」。風も春を伝えています。

4 月 16 日 枝垂れ桜の足下に鮮やかなタンポポがあちこちに広がっています。枯芝もどんだん緑に変わっています。今日は父の命日。1982 年に亡くなりました。当時はイスラエルがペイルストンまで攻め込む前にさまざまな地下戦争の続いていた日々。ベカー高原のあんずの花の下で、父はどうしているかな……と、脳梗塞で倒れた父を思っていた頃です。今日は花曇り。花吹雪を見つめながら父と対話。ちょうど姉の送ってくれた両親の写真を机に出しています。

T さんからお便り。4 月 4 日に花盛りの道を通って退院したとのこと。これからの反原発や民衆の側の活動のあり方など熱く語っておられます。そんな姿に励まされます。

リビア、エジプト、イエメン、パレチンなどに続くかたちでシリアでも反体制運動が激しくなっています。シリアが、イスラエルとの戦争国家の「治安対策」として、60 年代から「国家非常事態令」の名で、アサド体制に反対する個人・勢力を弾圧してきたのは紛れもない事実です。しかしイスラエルの侵略に対して、原則的に対峙してきたことで、イスラエルの占領と闘う勢力は、アメリカ・イスラエルを利するシリアの変化を特に警戒しています。

3 月 31 日、アサド大統領が「非常事態令」の解除を検討する司法委員会の設置を命じると、「レバノン進歩社会主義者党」のジュンブラット（80 年代までシリアと同盟。ハリリ暗殺後レバノンからのシリア軍撤退の先頭に立ち神の党らと対立。その後再び「言いつ

ぎだった」とシリアにあやまり親米姿勢を改めた)は、シリアは地域の安定に不可欠と述べ、「バース党地域指導部の数日前の決議を受けて、本質的な構造変革に向けた前向きな展望をひらくもの。そうした変革は真摯にフォローアップされ実践されれば、シリア国民の利益になり、またシリアの結束と国内の安定化に寄与する」、「シリアは愛国心について教える必要はない。とりわけ欧米からの一部の胡散臭い声は、改革を唱えながら実際にはシリアを破壊し、無秩序に陥れようと望んでいるのだ」と訴えています。

4 月 1 日、ハマスも「シリアの指導部と国民がパレスチナの抵抗運動を護ってきた」として、同胞であるシリアの側に立つと表明し、「シリアが国民の希望を実現し、シリアの安定と結束を維持し、抵抗の闘いの隊列における役割を強化すべく、我々は同胞シリアの指導者、国民の側に立つ」と述べています。ヒズブッラーもシリアの改革を支持し、またトルコ政府は、「アサド大統領の改革を完全に支持する」と表明したとのこと。シリア国内でもアサド支持のデモが、とくにイスラエル占領下のゴラン高原のドルーズ派の住民から起こっているそうです。アサド政権は、イスラエルに安易に妥協せず、地域の親米政権や勢力と対峙する人民勢力を支援してきました。しかし国内でのバース党独裁とそれを守る 17 もの治安機関はひどいもので、人民の要求は当然のものです。もちろん親欧米勢力、イスラエルの動きもあるでしょう。

中東・アフリカの支配者は、外国の援助や石油の富を私物化し、かつて富の再配分に公正をもって秩序をつくらうとした人も自ら台無しにして人民に君臨しています。しかしシリアはバース党政策として比較的富の再配分において、貧しい人々にいきわたる方途をとり、反占領闘争の要の国でもありました。でも長い秘密警察支配の弾圧は通用しません。国民との和解と改革によって、新しい中東の民主的スタイルをうみだし、抵抗運動の一翼として、変革されることを願います。暴力的弾圧はイスラエルを利するでしょう。

4 月 18 日 枝垂れ桜はまだ満開。少し散りはじめ。タンポポが黄色の花をふやしています。今日は診察を期待しましたがなし。

東電は今日の新聞では、事故の収束が 6-9 ヶ月と公表。政府も東電も包括的見通しを示さず、起こったことを追認しては、住民を落胆憤慨させてばかり。

今日は満月。まだ八王子に来てから月を探せていません。

4 月 19 日 明日は旧暦の穀雨のせいでしょうか、外

の桜が散りだすと、同じ速度で緑色の葉枝が広がっていくみたいです。今日は短く髪をカット。

お便り、T さん、K さん、姉他感謝。T さん切手ありがとうございます。

4 月 20 日 午前中診察。Dr. のもとに CT 写真も届いていました。Dr. は来週に専門家に精査してもらうとのことで、今回診察はありませんでした。CT 写真見たい目変えないみたいだし、私が八王子入所時の検査では、肝炎ウイルスなど身体になかったし、肝そのものが原発性のガンはありえないと Dr. も話していました。卵巣含めて来週血液検査で、クロスチェックできる腫瘍マーカーをふやして検討しようとのこと。私の方は点滴も経口抗ガン剤もへらしたので、食欲もおちず副作用もほとんどなく快調と伝えました。白血球に問題なければ、5 月 1 日から次の第 7 クールに入ります。

昼食後、処遇課より告知。昨日手紙にメディカルレポートを同封して投函しようとしたら、「信書に A4 のメディカルレポートは不可。これまではこれまで。4 月から新しい基準」とのこと。メディカルレポート（以下 M.R.）は個人の文書で A4 判用紙使用も不可とのこと。「これまで M.R. を書くために A4 判レポート用紙許可されたこと、これは「個人の文書」ということでなく、何かあった時にも公的に検証できるように、弁護士の要請にもとづいて数年前から記していること」などを説明しました。それで今日、その話を受けて検討した結果を伝えてくれました。手紙はあくまでも便箋で 7 枚以内。M.R. はその枠外として、同封許可を得て送るか「文無し投函」、「宅下げ扱い」とのことです。これまで M.R. も 7 枚枠内だったので得たようですと言ったら、ただし M.R. には意志を伝えたり依頼は書かないこと、それは手紙の方にとのことでした。

【編集室注：便箋寸法 230×176 ミリ、A4 判 297×210 ミリ】

その後処遇首席代理の方の面接。4 月 13 日に処遇課より告知された「N さんとの今後発受禁止措置」について質問と善処を求めて、処遇首席への面接を求めているものです。N さんは、これまでも学習資料も送ってもらったりの 60 年代からの友人。4 月 9 日の手紙で禁止となったということですが禁止を取り消せる条件はあるのか？ なぜどんな場合に「新法」128 条が発動されるのか？ など質問しつつ改善をと思いましたが、結論としては不可でした。

分かったことは、この処分そのものは、N さんに科されたのではなく、私に科されたものなので、N さん本人には発受の禁止は知らせていない。（届いたものは



釈放時に渡される。) これまでも N さんの手紙には抹消箇所もあり、「4 月 9 日の手紙で、深く検討し重い決断を下した」とのこと。度々あることではないとのこと。N さんは他の私の仲間の救援の関西責任者と名を示しており、処遇改善にも力を注いでいます。話の中でやはり他の救援との関係からこうした判断に至ったのだらうと思いました。私への矯正処遇にふさわしくないとの判断。今後賀状でも彼の名のものは門前払いで改善なども検討されないこと、また N さん本人以外の親族、夫人とかからは問題はないようです。新法見直しの年の中できびしく検討されたのでしょうか。これまでの処遇首席以下の方々から新しいスタッフになり、その中での違いもあるように思いますが、今のところ規則に触れないように文通を豊かにしていきたいと思えます。今後の教訓にしつつ、こちらの実情はしっかり伝えていきます。

4 月 21 日 雨。起床時に窓を打つ雨。緑がこれから広がる季節です。

「夢と希望」第 5 号、抹消箇所はいくつもありますが、はじめて届きました。厳しい条件、ことに「黒の告白」をはじめて読みました。東拘にいた頃、西川公判証言をめぐって考えておられたことと理解していました。私たちの闘いの不十分な誤ちをとらえ直しつつ、前に向かう力へと「黒の告白」がさらに続くことを願っています。いつも彼は苦難の先頭で闘い、私たちがとらえ返してきた基準に照らして組織も自らも問い返したい思い、批判覚悟ですすめたこと、私自身への批判としても受け止めた。どんな思いで書いたかと、そちらに気持ちがいてしまいますが、生きつづけてほしい。今日は茶道の日、しかし辞退してあれこれと考える一日となりました。

4 月 22 日 もう桜も葉桜です。オナガがけたたましい声で鳴いています。

昨日も余震、なんだか原発にも慣らされて、何も変

わらずの日本になりそう……と思っていたら、友人の便りの中、「高円寺での反原発の4月10日のデモでは15,000人が参加。しかも圧倒的に若い人と子供連れ。You Tubeの映像では伝えられていても、原発企業の広告や共犯の大マスコミは伝えていない」ようです。

午後4時過ぎ、「みなさんこんにちはー！河村たかし名古屋市長でえーす」との声。そうか、八王子の市議選中だ。楽しいので、宣伝カーでさわいでいました。「河村たかし」の連呼で、誰を応援しているのかわからなかったですけど。

4月23日 春らしい週末。もう寒さを感じません。窓の外には名残の花をつけた葉桜と土手にはタンポポ。今も第6クール投薬中ですが食欲はもりもりと復活しています。メディカルレポートで腫瘍マーカーの高い数値について書いたので、すぐさまKさんが調べて資料を送ってくださったようです。手紙は今日受け取りました。早いサポートに感激！

4月25日 朝から採血・採尿。体調も良く、朝・昼とよく食べてます。今日は歌唱指導の日でしたが辞退。午後友人よりカンパ、いつもありがとう。

今日は統一地方選挙の後半戦の結果が記事になっていました。投票率は戦後最低。菅内閣不信任の結果が国民から示された選挙。一つ良かったことは保坂展人氏が世田谷区長になったこと。反原発の庶民の願いの広がり！

夕方、たくさんのお便り。N夫人M子さんありがとう！沖縄でのシュノーケルを付けたたくましい姿を想像しつつ、楽しく読みました。これからも楽しみにしています。Tさんより穀雨の「ニオイコブシ」の写真。デジカメ歌人の一首は「義捐箱やり過ごす我が耳底に低く小さく「ボクガンバル」。

春から初夏近い日本。政治を政治家を変えよう！

4月26日 今日は4月になってはじめてのグラウンドでの運動。週1回ですが、4月は観桜会もあり、ちょうど点滴に日が重なってしまい、桜まつりの運動とはなりません。でもまだ葉桜の花の名残が舞っていて、足元にはタンポポ。建物を出てすぐスズランの群生、咲きはじめのツツジと春を満喫。トラックの芝のところ、よく見るとスズメの鉄砲、春紫苑、のげし、いぬふぐり、クローバー、カタバミなど、ミニチュアのような小ぶりの草がちよこちよこ咲いて、歩きながら楽しみました。

午後はメイの面会。仕事も始まって多忙の様子が元氣そう。会えるのはやっぱり嬉しい。

4月27日 今日は9時過ぎからテレビ。「プラタモリ」という横浜の幕末と現在の比較などの話。終わってベランダでの運動。桜の花びらがまだ足元に散っていて、プランターのパンジーは盛大に咲き誇り、数えてみると一株に21の花をつけているのもあって、もう春の盛りで寒くないです。

午後には診察。まず4月25日の採血結果から知らせてくれました。腫瘍マーカーCEAは12.2(前回13.6)で前回より下がって順調。CA19-9も131.3(前回361.0、正常値は37.0以下)と下がりましたが、この激しい上下の数値の原因が不明とのこと。また肝ガンのチェックマーカーのAFPは、10.6(前回19.6)と下がっていました。白血球も3,600。肝機能を調べるASTは53(前回49.0、正常値は37.0以下)、ALTは28(前回26)と少し高いようです。

またCT撮影の専門医による精査では、「去年10月のCT写真と変わっていない」、つまり肝臓に目視できるような腫瘍は見あたらなかったと知らされてホッとしました。でも卵巣は石灰状のものがたまって、卵巣腫瘍、加えて子宮筋腫の疑いありとの新見。「卵巣ガン子宮ガンによって、CA19-9が動いているのでしょうか？」と私の質問に、Dr.もわからないが産婦人科医にCTを見てもらうとのこと。連休明けの9日に血液検査の上、5月11日から第7クールに入ることを確認しました。

副作用のため第6クールの薬量を「副作用グレード3」にそってへらしていたのを少しふやし、「グレード2」の薬量に戻すとのこと。今のところ食欲もあり、快調に春を迎えています。

4月28日 春らしい晴天。窓の外には緑が風に光る美しい朝です。桜はもうすっかり若葉の輝く大木です。

連休がはじまる前の今日、昨日の診察結果を「文無し発信願ひ」をそえて「メディカルレポート」を送りました。姉や友人たちの心配や資料・お便りもあり、早くCT結果を伝えたかったためです。手袋も今日回収です。もうすぐ八十八夜だし、5月6日は立夏ですから手袋は不要ですが、末梢神経障害の私には今日まで必要でした。次の第7クールの時は大丈夫でしょうけど。

今日の新聞ではシリア政権によるデモ徹底的弾圧が報じられています。治安部隊がダリアの街を封鎖し、電気・電話も切断して、25日弾圧を行ったとのこと。政権に「改革」を求めていたのが、もう「体制打倒」へと変わったとのこと。こうした3月以降の動きに、パレスチナでは逆に若者たちやPFLPはずっと主張してきたことですが、「パレスチナ指導部の統一、挙国

一致内閣」を求めてデモを拡大させてきました。2007年の対立以来のハマスとファタハは、27日、和解することに基本合意し、挙国一致内閣を発足させて、1年以内に大統領と自治評議会の選挙実施をめざすというものです。近くハマスのミシャールとファタハのアッバスが合意調印も行うとのこと。

中東の変化、シリアの動乱、「パレスチナペーパー」(アルジャジーラによって暴露されたパレスチナ・ファタハ自治政府らのパレスチナを売り渡すようなアメリカやイスラエルとの秘密交渉の記事)など、パレスチナ人民がパレスチナの人民の意志にそった変革を求めてきたこと、ファタハは行きづまり打開にハマスとの和解の方向に動いたというところでしょう。ただしファタハの幹部が特権や縁故の利権を改めてまじめにことに当たるかは怪しいものです。ファタハ内部の改革を求める人々の力が、どう誠実に発揮されるでしょうか。

今日の4・28は、60年代のことをあれこれ思い出させます。それに今騒乱のダリアの街は、71年によく行った街。ダリアという発音に近いけど、ゴラン高原のパレスチナの最前線の「前線兵站補給基地」があったところ。当時はシリアもゴラン高原からパレスチナ戦士の出撃を許可して(73年10月戦争まで)、各組織はダリアにシリア前線本部を置いてヨルダン内戦後のヨルダン潜入なども担っていました。ダリアは土でできた塀も家も砂漠の中の村という感じでした。あれから40年、国境の街としてずいぶん変わったでしょう。そんなことを思いつつ4・28を過ごします。

4月29日 連休の一日目。とても良い天気。パレスチナが今後どう展開するか、また分裂になるのか、ちょっと気がかりです。統一、パレスチナ勢力の統一を訴えつづけたハバシュ議長やアブアリ議長(共に故人)や手元にある公判資料の中から学び直したりの日です。

祝日のため昼にお汁粉が出ましたが、水っぽい。東拘の小豆いっぱい餅入りとちがって、ぬるいスープに少量の小豆、小さい椀。東拘では5日は柏餅ですが、ここはまた水っぽい汁粉のようです。でもやっぱり被災した人々を思うとぜいたくですね。

4月30日 窓をあけると目の前のグラウンドに向かう土手に、ツツジの白とえんじ色のつぼみが一杯。緑の葉から飛び出してきたように。連休中に読みたかったマグレブ紀行や官本の新田次郎全集などゆったり読んだり短歌を詠んだり。4月尽です。30日現在大震

災の死者は14,662人、不明者は11,019人、避難している人は127,076人とこと。政府の後手後手への住民の怒りに同情です。フクシマは今もキケンのまま。

5月1日 あつという間に5月。メーデーを思い、また水俣病の50年目とラジオから。変革のパレスチナ、日本を夢想する一日。

5月3日 憲法施行64年目。今年は失業と大震災のために国民が健康で文化的な最低限の生活をする権利をうたう第25条が9条とひとつになって訴えているようです。回り道でも、戦後日本が9条日本を誠実に歩んできたならば、米軍基地もなし、原発もない住民の意志と身の丈に合った豊かな社会を築けたことでしょう。3・11事変を今こそ9条にふさわしく自衛隊も本業を国民を災害から守る活動を旨として、軍事組織から脱皮する時であります。「平和国日本に原発はいらない」と「9条社会の徹底」を誓う日として、今年の憲法記念日を迎えたい。

そんなことを考えている星時、スポットニュースで、ビンラディンが米国政府によって殺害されたというニュース。ああ、これで中東の民衆の闘いは、親米分子が権力を握ることを許さない流が加速するなと思いました。誰も、アルカイダの闘いに共感しているからではなく、米国のやり口に対する新しい怒りを注いだからです。イスラムの習慣や国際法を無視したアメリカのやり口、イスラエルばかり助けてきたアメリカの不正。中東の民衆は一方に敬虔なイスラム教徒の社会でありながら、若者たちは西欧ファッションやポップスを愛し憧れています。でもそんな若者たちも米欧イスラエルの不正な政策のことはしっかり心得ています。イスラエルも米・仏も力を尽くして民衆蜂起を自分たちの利益に誘導しようと操作し続けるでしょう。でも、パレスチナが公正に扱われない限りそれは成功しない夢です。イスラエルやアメリカはビンラディンに限らず、国家政策として平然と暗殺をくり返している国、さらにこうしたやり口を続けるでしょう。それはアラブパレスチナ民衆のよく知るところです。

昨日は連休の合間の平日で、手紙や資料をたくさん受け取りました。楽しく読んでます。感謝。

5月5日 昨日の新聞では、ウィキリークスによって、「米軍グアム移転に水増し」が暴露された記事。日本と米国支配層の腐った恐ろしい関係。国民を馬鹿にした姿。同じ構造は、地震国日本にこれだけの原発を作り続けた情報操作が浮かびます。

また新聞には、各地で憲法と震災を論じ合う集いがあったとのことです。こういう中に日本の救いを見えています。

また一方昨日4日、エジプトのカイロで、アッバス大統領とハマスのトップのミシャル氏が和解合意の式典にそろって出席。4年にわたる分裂状態を終えて、暫定政府づくりから選挙の実施へと向かうとのことです。米政府の支援のもと、ファタハの腐敗分子がどんな手を使うかわかりません。でもエジプトの仲介もムバラク時代よりも民衆の監視の下で公正を強いられるでしょう。エジプト政府は、なによりもガザ・エジプトの国境通過を正常化させ、イスラエルの封鎖政策の解決をはかるべきです。PFLPを含む暫定政権は、希望の道を築いてほしい。このパレスチナの新展開は中東民衆革命に、良くも悪くも影響をもたらす筈です。

5月6日 立夏！でも曇り空。窓の外には丸く刈り込まれたツツジの緑の間から、どっとピンク、白とたくさん花が咲きはじめています。休み中の手紙資料もたくさん届きました。感謝。Rさんの絵手紙2通！ルッコラの花がとってもいい！次の「オリブの樹」にも載せたい絵です。Kさんの庭の藤のみごとな長く優雅な房。甘い匂いが香るようです。Iさん楽しい情報と元気。4月16日の御堂筋パレード2000人以上！いいね！Oさん、宮崎先生お便り感謝です。みなこちらで桜を見られたこと、食欲出てきたこと喜んでくださっています。

Uさんの便りには、荒さんが5月3日夜9時に前立腺ガンで亡くなられたとの知らせ。え！と衝撃を受けて寝つかれません。プント再建一緒にやるならやろうかと語り合った面会の数年前。その後、私の方もガンになり、手術後の夏に荒さんのガンが発見され、治療に関して情報交換しながらきたのに。去年の面会が最後でしたが、私が受刑処遇になってからは直接お便りを出せませんでした。そんな早すぎる！最後に会った時には、骨にも肺にも転移したと言いながら、副作用で萎れた私より元気で、昔の同世代のいたずら時代を笑って語りました。荒さんは体力があっただけでガンの成長が早かったのか。67年から69年時代の早すぎる仲間の死に、まだ寝つかれず呆然。

5月7日 雨の獄庭にツツジが美しい。タンポポもずいぶん綿帽子になりました。

今日の新聞では「菅首相浜岡原発の全炉の停止を中部電力に要請」とのこと。国民の反原発に敏感に対応した熟議なき結論のよう。でもどういいうきさつであ

れ、菅内閣の初めてのまともな決断は喜ばしい。「浜岡原発だけ」と言わせないように、さらに脱原発の国民の声で国と社会の変革を！

もう連休も終盤です。今日はゆったりとパゾリーニ詩集を読んでいます。68年に観た「アポロンの地獄」の映画の監督にして75年奇妙な虐殺をされた人。「グラムシの遺骸」や「イタリア共産党を若者の手に!!」の逆説的な新左翼への罵倒と求愛と挑戦も心にひびく。訳者の四方田犬彦先生の共感し心を込めた翻訳がとても響く詩です。

今日受け取った昨日の夕刊に荒さんの訃報が載っていました。

新聞の訃報の線は黒々と近き友の最後を記す
合掌

5月8日 こよなく晴れた五月晴れ、母の日にふさわしい。

昨日には「原発廃止」に渋谷中心に15,000人のデモ。20代の若者たち。Sちゃんもまた行ったかしら。

5月9日 朝採血。午後診察。Dr.より白血球は3,450だが、好中球【編集室註：5種類ある白血球の1種類】がガイドラインの1,500にたりず1,200なので、骨髄抑制に対してまた皮下注射ノイトロジンを5日打って、来週16日（月曜）の血液検査の上で第7クールをやりたいとの話。5月11日からと思っていたのですが1週間延期です。本人は体調いいと思っているのですが。

5月10日 パレスチナ木霊のように血脈に
巡るリッダの5月となりぬ

窓の外は白ツツジとピンクのツツジが華やかです。ベランダでの運動はもう寒くなく、走ると汗をかいてます。

友人たちから今年の5・30の集いが5月28日にあることや荒さんの病死のこと伝えてくれました。

「選択」や「紙の爆弾」6月号、ネット資料、「アジア新時代と日本」、「人民新聞」など届きました。資料には「反原発」を地道に訴えてきた人々の見解など多数。当初から「フクシマ」はレベル7で、メルトダウンははじまっており、圧力容器破損を指摘しているのに、政府・東電・マスコミの一体となった甘い見通し。「反原発」の人々の声を大新聞はほとんど取り上げない。「震災報道」姿勢について、「ニューヨークタイムズ」東京支局長マーティン・ファクラーは、大マスコミメディアが、東電が発表していることを忠実に発表する

だけで、記者クラブに陣取って情報が手渡されるのを待つだけと批判しています。「自分からネタを探して報道する精神がほとんどない。少なくとも当局側と対峙して、国民側について報道する姿勢が感じられない」、「一言でいえば、日本のジャーナリズムは受け身のジャーナリズム。賞をもらう人は、スクープをするのではなく、与えられる人。調査報道でも何でもない。記者が記者クラブの席に座り、情報源とお酒を飲みに行き、時間がたつにつれて仲良くなる。それでスクープをもらい賞になる」、「読者層も含めた市民参加型社会の欠如に他ならない」（「選択」5月号）と率直です。まったく。

市民は気づいており、変革を望んでいるはず。かつての私たちの世代のような「急激な」ものでなく、きっちりと法的にも制度的にも変革する道を。合法的に合法性を活かして、最善の創造的な闘い方を！と、辺境で願いつつ。

5月12日 雨。今日はグラウンドでの運動と朝言われて楽しみにしていましたが、昨日について雨が降りだして中止です。

皮下注射のあとは午前中は房内検査。昨日から始まる予定の第7クールが延期なので、資料や本を読んで過ごしています。原発関連と中東関連の資料。メイや友人たちからお便りありがとうございます。

5月13日 今日は晴天。でも「教育的処遇日」。月2回、金曜日に、主に職員を支える徳役の人たちのための免業教育日です。運動や業務はなく、この日は入浴や受信、食事以外静かです。

新聞では今頃になって、「燃料棒を冷やす水が圧力容器の四分の一以下しか入っていない、圧力容器からも水もれ」を発表。メルトダウンが起きていたことを認めたとのこと。外国からも国内の反原発専門家や技術者からも言われていた通り。震災から2ヶ月、1号機の爆発から2ヶ月もたつてやっと初歩的なことを認めたとは――。

広瀬隆さん、小出裕章さんの手元資料を学習しつつ、東電の「工程表」がいかに主観的願望かとあきれてしまいます。加えて今日の新聞では、3月14日に水素爆発した3号機の高放射線を把握しながら、公表してこなかった内部資料も判明。東電の首脳人は、被災者・現場作業員たちの犠牲の上で、もうけと会社のメンツと存続に頭を使っているばかり。今になってもまともに対応していない。

Yさん他3人の友人からのお便り感謝。Yさんの本出るのですね！祝！楽しみにしています。デジカメ

歌人の立夏の便りはハナミズキの花。それに二首。一首は“つきまとう花びら毎の思い出を声荒ららげて振り払う夕”

5月15日 夏のような朝。ペイルート、パレスチナを思い描いています。

今日はナクバ（NAKBA、大災厄）、民族の破局の5月の決して忘れられない日。47年11月、パレスチナ人の意志も参加も問うことなく国連総会でパレスチナ分割が決議され、その決議からユダヤ武装機関によるパレスチナ占領が始まったのです。そして48年4月にはディール・ヤシン村で幼児・子供・老人・女性を含む村民254人が虐殺され、5月14日、「イスラエル建国」宣言なされたのです。この「建国」からパレスチナ住民にアラブ諸国が加勢してさらに戦乱が深まりました。パレスチナ人は追放・民族浄化の惨劇の中で生きて闘いつづけ、この5月の14・15日、祖国全土解放の誓いを新たにします。難民キャンプを中心に武装デモや記念行事、国境地帯からは武装闘争がさらに闘われる5月です。「リッダ闘争」はこうしたナクバに反撃した闘いとして「ディール・ヤシン作戦」の名で行われました。今も難民キャンプ、パレスチナ西岸自治区やガザで反占領の新しい統一の活動が、このナクバの日の闘いとなっていることでしょう。パレスチナの国旗のひるがえる隊列に連帯！

そしてまた今日は日本では39年前、沖縄が日本に「返還」された日。今の沖縄のきびしい現実、返還の密約やグアム移転費の水増し密約のような米日支配層の下で、今も返還は完了していないとしみじみ思います。

5月16日 5月14日までの皮下注射を終えたので朝に採血。午後診察。白血球も6,170、好中球は57.8%になったので、第7クールは18日（水）から始めるとのことです。

5月の歴史深い日々、獄も新緑が光る美しい時です。震災2ヶ月を経てなおきびしい状況にある被災者や人災フクシマの惨状に広がる被害、それでも国民の同情や支援が少しずつ国や企業を正す方向へと進む兆しがありそうです。反原発も復旧・保障もさらにと！と願いつつ、パレスチナの「闘いとる公正な平和」を重ねて祈ります。

104号の訂正とお詫び
・p4右列上から4行 ●● → インドのニューデリー
・p7右列上から1行 ●● → 末端

ずっとウソだった

辻 邦

■レベル7と「メルトダウン」

東京電力が、ようやく「メルトダウン」を認めた。福島第一原子力発電所1号機で原子炉内の核燃料の大半が溶融し、高熱で压力容器底部が損傷した問題について、東電は5月12日、「直径数センチ程度の穴に相当する損傷部から冷却水が漏れている」と発表した。溶融した燃料は压力容器の底部にたまっていると見られ、東電は、この状態が、核燃料の「メルトダウン（炉心溶融）」であることを認めた。

さらに5月15日に東電は、1号機で起きた「メルトダウン（炉心溶融）」が最近起きたものではなく、同原発が津波に襲われた約4時間後の3月11日夜には始まっていた、とする分析結果をようやく公表した。

東電はこれまでは「メルトダウン」を否定し、「燃料の一部損傷」などと説明。日本政府、多数の御用学者ともども「危険性は少ない」「原子炉は爆発しない」「チェルノブイリ再来にはならない」といった言葉を繰り返し、原発事故の矮小化と「原発絶対安全神話」の防衛に終始してきた。

しかし今となっては、事故直後から繰り返されてきた日本政府・東電・御用学者たちの発言が、事実を正確に伝えていなかったことは明白だ。それどころか、実は意図的に虚言を繰り返してきたのではないかという疑念すら、拭い去ることが出来ない状況だ。

例えば、3月22日時点で原子力安全・保安院は、福島第一原発事故へのIAEA事象評価者尺度（保安院暫定評価）の値を、レベル5（1号炉～3号炉）乃至はレベル3（4号炉）としていた。ところが4月12日になって、納得のいく説明もなく、突然、レベル7に引き上げた。レベル7と言えば、史上最悪と称されるチェルノブイリ原発事故と同じである。これに対しては、保安院は最初から事故の深刻さを認識しながら、「原発絶対安全神話」を死守し、世論の批判や原発に対する疑念・反発を払い除けようと、段階的に数値を上げたのではないかという疑念を抱かざるを得ない。さらに、東電や御用学者らは、「同じレベル7でも、危険度はチェルノブイリの方がはるかに高い」などという詭弁を展開し、福島原発事故の危険性を薄めようとあがいているように見える。もっとも、彼らの説明は著しく説得力を欠き、往生際の悪さと見苦しさが際立つだけである。

「メルトダウン」問題にしても、事故直後の報道では、多数のメディアが「炉心溶融」発生、乃至はその可能

性を伝えていた。ところが日本政府も東電もそれを認めず、「メルトダウン」という言葉を強引に押さえ込もうとした。それが、今回突然の「メルトダウン」認定だ。原子力安全委員会委員長・斑目春樹は、5月12日の記者会見で、「早い段階から燃料が溶融していると考えていたので驚きはしない」（5月13日・日経新聞）と発言している。メルトダウンが明らかになったことによって、「原子炉安定化」に向けた工程表で予定していた、格納容器を水で満たす『水棺』方式を断念せざるを得ないという、極めて重大な事態に追い込まれた状況であるにも関わらず、平然と「驚きはしない」と言っているこの人物の思考回路は、どうなっているのだろうか？ 理解に苦しむざるを得ない。

東電が事故当日のデータを初公開したのは、ようやく5月15日になってからだ。「事故対応に追われていたため」という詭弁は通用しない。東電の社員は、正社員だけでいったい何人いるというのだろうか。しかも、実際に現場対応や危険な作業に従事しているのは、孫受け・曾孫受けの非正規雇用労働者たちではないか。東電の幹部やエリート正社員らの多くは、日常的に現場に赴いてなどいないのだ。

ここで気になることがある。それは、東電幹部やエリート社員たちが、原発施設の現場労働者に対して、どのような意識を抱いているのかという点だ。残念ながら、これまで原発の現場で日常的に行われてきた酷い実態——杜撰な作業内容、賃金のピンハネ、薬物蔓延、事故隠し等々——に関する多くの報告や内部告発を見聞きするたび、そこに、東電幹部・正社員らの歪んだエリート意識を感じてしまうのは、私一人ではないだろう。

■「やっぱバレてしまったな」

原発関係の専門家でも何でも無い私には、以下のような極めて重大な事実——当初は約300度だった炉心温度が、3月11日午後6時過ぎから急上昇し始め、それに伴い、燃料最上部から約5メートル上にあった原子炉の水位も、津波から約4時間後の11日午後7時30分頃には、約10メートル低下し、全ての燃料が水面から露出。7時50分頃には、燃料が压力容器の底に落下し始め、炉心溶融が始まった。11日午後9時には、炉心温度が燃料（ペレット）自体が溶け始める2800度に達し、注水開始直後の12日午前6時には何らかの理由で压力容器に穴が開き、水位が急

落した。津波襲来から約15時間20分後の12日午前6時50分には、核燃料の大半が原子炉压力容器底部に崩落した状態になった——が、事故発生後2ヶ月も経過してからやっと公開されたのか、正直なところ全く理解出来ない。

さらに理解不能なのは、東電によるデータ初公開後の5月16日、政府・東電統合対策室の記者会見の際、首相補佐官・細野豪志が、今さらながら、「2、3号機も（炉心の溶融が）ありうるという前提で考えたい」と述べたり、5月17日の記者会見の席上、官房長官・枝野幸男が、福島第一原発1号機で大震災による津波襲来の前に、作業員が緊急時冷却装置の「非常用復水器」を手動停止した可能性が指摘されていることについて、「報道で初めて知った」と平然と述べ、今後、震災直後の1号機の状態を含め、東電に「全面的な情報開示を求める」などと発言していることだ。

とりわけ、枝野の発言には呆然とさせられた。日本政府が今に至るまで、東電に全面的な情報開示を求めているなかったという恥ずべき事実を、自ら公表してしまった愚かさを、この能無し官房長官は全く理解して

いなかったからだ。

このような愚鈍愚昧な連中の言葉を信じる御目出度い人間が、果たしてこの世にどれほどいるのだろうか？

いずれにせよ、この有様では、「日本政府・電力資本・御用学者たちは、グルになって原発事故の深刻さを隠蔽するため情報操作を試み、虚言を振り撒き、事実の公開・情報開示を意図的に遅らせているのではないか？」と疑われても仕方がないだろう。

そして、「ウソをついて逃げられるのなら、最後までウソをつき続けたい。隠し通せるものなら、どこまでも隠し通したい。出来ることなら都合の悪いこと全部を闇に葬り去って、何もなかったことにしたい」という渴望が、官・民・学の三位一体＝原発推進勢力の心中にあることは、容易に想像出来る。しかし、今回ばかりはそう簡単には行かないだろう。

「♪ずっとウソだったんだな～。やっぱバレてしまったな～」

高知から東京へ

唐 一

私は3月30日に高知に着いた。3・11のあとであるここでは、高知での反原発運動の動きについて触れたあとで、東京での活動、ひいては今後の展望について少し考えることとする。滞在期間が短いので、高知での運動といっても、極めて限られた経験を述べるにとどめる。

2011年4月29日、高知市内で反原発のデモ、集会が行われた。参加者は約200人である。教こそ大規模ではないが、デモ、集会ともに活気に満ちたものであった。愛媛に伊方原発を抱えることもあり、また浜岡原発への強い警戒意識のために、大いに盛り上がりを見せた。特に四国電力の前では「原発を即座に止めろ」とシュプレヒコールが長い時間に亘って繰り返された。参加者も高知の住民にとどまらず、徳島、愛媛などの近県からの参加や、世田谷区から「避難」してきたばかりの女性の参加も見られた。集会では東電に勤務していた技術者による内部告発や、今後の活動予定連絡などが行われた。質疑応答も非常に活発で、発表者の話が終わると、待ち構えたように質疑や持論の展開などが行われた。この活発さは東京での集会とは趣きを異にするものであった。活動に慣れている人が多いと思われる。翌日は伊方を抱える愛媛で2回目

の企画が予定されていた。

早速、私は主催者に連絡し、会員加入の手続きを済ませた。メンバーリストに加入したが、登録者は100人を超えているとのことである。最近の活動として、5月13日、四国電力高知支店に対して伊方原発の運転停止を求める2640筆の署名を提出したことが挙げられる。伊方原発は、浜岡に次いで大地震による災害が予想されていたが、浜岡が原発停止となった現在、最も被害に見舞われる可能性が高くなっているという危険な状況にある。高知には窪川町で1988年に住民投票によって原発設置を住民が阻止した歴史がある。鼻っばしの強い土佐っ子の伝統があるのか、いまだに灯は消えていない。

さて、東京での反原発運動について考えることとする。ただし、私は東京での現場におらず、仄聞した範囲での愚考である。2011年4月10日、高円寺デモで15,000人の参加があり、ついで5月7日に渋谷デモで同じく15,000人の参加がみられるということが起きた。一瞬、目を疑ったが、驚異的な数である。数に拘泥するのは古い左翼にありがちな悪癖ではあるが、これだけの規模のデモは、恐らく197

0年代初頭以来の現象ではないだろうか。特徴としては、これまでにデモに参加したことのない人たち、若年層と子連れが大半という現象である。しかも、参加はチラシや掲示によってではなく、携帯によって自然発生的に集まった点が挙げられる。ここに、全く新しいタイプの動きが見られる。危機感をもっている人たちは明らかに増えている。いかなる政治的な枠組みや組織動員もない中でこれだけの人々が参加したことは画期的な出来事である。政府や東電への鬱積した不満や、日常生活がもはや非日常生活の毎日であるという抑圧感が、なんとか表現したい、声を出さないといけない、として街頭表現行動を促すきっかけとなったのであろう。4・10高円寺デモを企画した友人は、当初は500人から多くても1000人くらい、との予想だったが、完全に「裏切られた」結末となった。解散地点での参加者流れ解散誘導は、解散地点でのパニック回避しか頭にはなかった、とのことである。新しい酒は新しい皮袋に盛らなければならないだろう。

来たる6月11日に「国際行動デー」が企画されている。100万人を目指す世界的規模の企画である。パリの友人からの呼びかけであるが、テーマは「反原

アラブ物語(14)

シンガポール・クウェート作戦の時代—アジア連帯(1)

重信 房子

1. ハバシュ会議(73年12月)を経て

「ドバイ闘争」の矛盾に直面したおかげで、私にも、また私たちにも様々なことが見えてきた。私はリッジ闘争後の対策として、場所的にもバグダッドに居たことで、ペイルートの事情をよくつかめていなかった。イラクに居れば、パレスチナ解放闘争を基盤としながら、また東欧ソ連との交流やクルド民族や共産党など、様々のことがパース党の交流中心となる。

パレスチナ解放闘争の政治やPFLPの事情がダイナミックに動くのは、やはりペイルートである。ニザールのペイルート不在の条件もあったし、また、Dさんらペイルートの仲間たちも、医療や難民キャンプの中の活動が中心である。ペイルートでは特に地下活動形態にあるアウトサイドワークとは国際関係局を通じたコンタクトしか作られていなかった。それがドバイ闘争の真相究明の討議要求などを経て、だんだん内情もわかってきた。

一つは、リッジ闘争後、いくつかのアウトサイドワークと協力している国際グループや組織が日本人との共闘や会議を申し込んでいたが、「保安上の理由」で、

発」である。フランスは早い段階で大使館員の日本からの撤退を呼びかけた国である。フランスに住むアフリカ人の友人は3・11当日の段階で安否を気遣うメールを送り、別のフランス人も即座に、「南へ、西へ！」と避難を呼びかけた。

一方、驚くべき現象がある。日本の鈍過ぎる反応である。福島第一原子力発電所1号機がメルトダウンしたとされるニュースが日本中に流れているにも拘らず、日本人の多くは「大丈夫」「やっぱり・・・でした」の繰り返して、声高々に怒りの声をあげている人は少ない。メルトダウンの事実が、地震が発生した3月11日から1~2週間内に報じられていたら、多くの日本人が関西以西に逃げたり、海外へ逃げていただろう。しかし地震から2カ月が経ち、あらゆる危機的状況が繰り返されてきたため、危機的状況に対して感覚がマヒしてしまったという声も出ている。(「メルトダウンしても驚かなくなった日本人—危機的状況が続いたために感覚がマヒか」Rocket News 24, 2011年5月13日 15:30)

これからの動きは全く見えない。動きを作る一人として、今、何をすれば良いのだろうか？

アウトサイドワークから断られていたらしい。欧州やラテンアメリカの革命組織の彼らが、PFLP指揮下の日本人を買いかぶっていたこともあったのだが、国際主義のシンボルとして知れ渡っていて、会議や共闘を申し出ていたらしい。アウトサイドワークは国際関係局へと仲介せず、そのことをニザール丸岡にも、ペイルートの日本人仲間にも伝えなかった。私たち日本人が個々のボランティアとして、PFLPの指揮下に居たためでもあったかもしれない。

当時、リッジ闘争後の厳しい地下攻防の折から、私はPFLPの国際関係局や情宣局を通じたアラブの政治交流はバグダッドを中心に行っていた。アウトサイドワークの方は部外者だったので、知らずに居た。アブ・ハニは、当時暗殺攻撃に何度も直面してきたので、保安条件からも、アウトサイドワークを中心に放射状に各組織との共闘をコントロールするシステムを作っていた。

今から思うと、スパイ潜入を何度も経験し、摘発もしてきたアウトサイドワークの正当な指揮権だったと言えるが、当時は不信も生まれた。イタリアやドイツ、

フランスの欧州の新左翼グループやラテンアメリカのグループなど、各共闘仲間同士が偶然の機会に事務所で会ったりすると、連絡を取り合ったりし、実情を語り合ったりした。そして、PFLPアウトサイドワークから「保安上」を理由にして分断されていると、不満を持って意見を提起した。私たちも意見書を提起した。

もう一つ見えてきたことは、PFLP内で、アウトサイドワーク局の活動が、PFLPの総路線と矛盾しはじめたことであった。ハバシュ議長との会議で、すでに、70年の中央委員会72年3月の党大会で、ハイジャック闘争が原則禁止されてきたことも分かった。

私たちが「ドバイ闘争の事実究明」を掲げて、政治局や国際関係局に意見書を出したり、日本人ボランティアが一丸となってアブ・ハニ批判や責任追求したことが、PFLPの党内論争を促進したらしい。ドバイ闘争での私たちの追求は、アウトサイドワークの義勇兵として共同していた日本人や在欧の日本人ばかりか、在欧のラテンアメリカ人、またアウトサイドワーク局内のパレスチナコマンドなどにも、同調する者が居た。

ことに、私たちが、ドバイ闘争の作戦部隊から(リビアで作戦部隊の一員であるCを通して訴えてほしいと頼まれた)「政治的話し合いの欠如」「コマンドを大切にしない扱い」という批判は、ドバイ闘争のパレスチナ戦士の家族、仲間たちから喝采を受けた。当時、私はこうした追求は「つもり」としては、PFLPの変革、アウトサイドワークの前進にとって良かれと思って、大いに主張していた。ところがそれが旧来の党内闘争に火をつけたようだった。

72年3月のPFLP党大会前に分裂騒ぎになって、「革命的PFLP」という組織ができ、そのリーダーたちのバラバラさから空中分解した。この時は、旧アラブ民族主義者運動(ANM)のイラク系のリーダーの人々がPFLPから出て行ったが、彼らもやはりアウトサイドワークの「独立王国」アブ・ハニ路線を批判していた。これらが再び問題となった。「アブ・ハニは、民主集中のML主義原則を無視した組織活動だ。旧ANMの仲間意識でPFLPの党員基準に合わない人材を勝手に登用し、独立王国を築いている」などの批判である。

それら反アブ・ハニ勢力は、私たちの『「ドバイ闘争の日航への要求書」の真相究明』を利用して勢いづいて、アブ・ハニの組織活動処分を要求するに至った。73年12月のハバシュ会議の頃から1月にかけて、そうした査問審議が為されはじめていた。私も証言を求められて、それをやっと理解できた。

当初から、日本での武装闘争路線を継承し、パーシムがアウトサイドワークに招請されて以来、私たちはずっとPFLPの中でもアウトサイドワークの国際遊撃戦を評価していた。私にはニザールが経験したような作戦立案をめぐって、アブ・ハニと直接の対立もなかった。その分、私はその活動を発展させるべきだと考えていた。しかし、私たちの行動がPFLPの党内闘争の国際ゲリラ戦の路線に対立するものであったことを理解した。そのことは当時私の望むものではなかった。

それらもあって、問題が大きくなってしまった後で、私たちはアブ・ハニの処分には反対の立場を表明した。なぜなら、私たちが批判したことが原因となって、内部矛盾が拡大することをこれ以上望んでいなかったためであった。こちらの望みは、アブ・ハニ部局の下で活動する者、他の革命組織の人々や日本人同士の民主的で、自由な交流を求めたものであった。それ以上を求めてもいないし、組織問題に介入する考えもなかったのだった。これまでは、日本人同士でも、手紙のやり取りが、国境を越えるといつ届くのか計算もできなかったし、ニザールと会うには、アウトサイドワークの合意が必要だった。

しかし、ハバシュ会議を経て、ペイルートに日本人間の「連絡センター」となる小さなアパートを設置し、電話もある。これは、当時の私たちにとって大きな一歩だった。このアパートの長期的な確保は、私の本の出版やカンパで補える見通しであった。今後日本人同士が独自に部署を越えて会議し、交流しながら、一体化していくことを、PFLPも合意している。アウトサイドワーク指揮下の日本人も非軍事的部署同様に、連絡の自由を確保できればそれでよかった。

私たちは、国際ゲリラ路線についても敵イスラエルのテロが無制限である以上、ハイジャック闘争含めて、「戦術は主体的条件で決めればよい。この戦術は取りやめるなど言わず、取りやめるとしても黙っていた方がよい」などと主張していた。それで、アウトサイドワークの政治的立場を援護支援した。これらは情宣局も同様の立場にあった。国際関係局は、組織活動の逸脱の是正をより強く主張していた。私はこの時の経験を通して、自分たちが他の組織の組織問題に介入してきた結果に至ったことを学んでいくことになった。

結局、アブ・ハニの処分は行われたが、軽い3ヵ月の権利停止となった。

パーシムの居た時代から、アブ・ハニは、情宣活動の部署に居た領域の違う私と話し合う必要もなかった。また、私は決死作戦への疑義やドバイ闘争後の責任追

及などしてきたし、アブ・ハニから私は敬遠されつづけていたと思う。

しかし、アブ・ハニらアウトサイドワークの政治的役割を支持し、アブ・ハニの処分に対抗した。アブ・ハニもそれは理解したように思う。またその後、後述するイラク政府に対応をとる関係で、アブ・ハニと私の協力が生まれた。イラク政府の独裁的なやり方が、当時、バグダッドで活動する多くの解放勢力や人々を団結させたと言うこともできる。イラク当局に対する対策に加えて、ニザール不在中のアウトサイドワーク内の日本人への対応やトラブルに対して、私が何度か相談を受けるようになった。アブ・ハニとしては、新日本人兵士や在欧日本人対策としても、パーシム後にザール不在時には、一番古くからいる私とリーダー格の在欧のJに聞いてみよう、ということになったようだった。

しかし、PFLPの処分を受けても、アブ・ハニもアウトサイドワークも、その活動スタイルは変わらなかった。闘いへの私心の無さで、「これが秘密を守る最良の方法」と確信するゆえだろう。アウトサイドワーク局に対する他の部局からの批判があったことで、アウトサイドワーク局はPFLPの指示によって、組織をオープンに改組するように求められたが、拒否していた。「闘いのためだ。反イスラエル戦を闘うために必要な組織体系は変えない」。アブ・ハニの立場は、これまでとまったく変化しなかった。

ベイルートでも、当時PFLPの軍事局に所属していたレバノンに居たカルロスらと、Dさんもアウトサイドワーク批判をしていたようだった。当時の私は活動領域も違ってカルロスを知らないが、他の日本人ボランティアは顔見知りだ。カルロスは70年のヨルダン内戦後、ヨルダンからレバノンに引き上げてきたボランティア兵士の一人であった。難民キャンプ防衛やフィールドワークで、南部戦場に居たカルロスとは日本人ボランティアも友人である。しかし、アウトサイドワークへの批判の急先鋒だったDさんや他のボランティアと離れて、その後カルロスはアウトサイドワークに招請された。能力もあったし、本人もヨルダン内戦の教訓としても、遊撃戦を闘いたいと思ったのだろう。また、日本から来てゲリラ戦を望んでいたYさんらも、アウトサイドワークにすでに加わっている。

リッジ闘争以降、パーシムらの闘いのおかげで、日本人コマンドに対して、アウトサイドワークは門戸開放していた。リッジ闘争以降、日本人は南部戦場などでのフィールドワークは空爆のターゲットになるということで、レバノン南部常駐のフィールドを離れた活動になっていた。

当時は、ボランティア参加の身分は、あちこちで議論になった。無給ボランティアも居たし、PFLPのメンバー程の給料を受け取る者も居た。PFLPとしては、PFLPのメンバー同様の厚遇のつもりで、わけへだてなく、組織活動の一員に組みこんでいる。しかし、それを受ける側は、そう感じなければ矛盾である。ボランティアの私たちは「対等」を求めると、PFLPのアウトサイドワークやそれ以外の部署でも、そうした矛盾はあった。日本人は、他のヨーロッパのボランティアの人々のような対立には至らなかった。それは、PFLPの人たちが持っているパーシムたちの闘いへの身内意識や敬愛によるものだっただろう。「資本主義の国から来た者は、権利ばかり追求する」と、情宣局でもPFLPの仲間にはぼやいていたのを思い出す。

こうしたPFLPの事情と軋轢はあったが、私たち日本人は、ハバシユ会議によって組織的独立へ向けた活動が合意されて、多くの矛盾は解消の目処が立った。PFLPの指揮下で小さなフリーハンド「自由」を得た。「自由」と言っても、まだ、移動上の旅券や身分証、財政はPFLPの各部署のお世話になり、対外関係もPFLPの対外関係局、政治局の合意に基づいて行われていた。また、軍事はもちろんアウトサイドワークの指揮下にある。

しかし、小さなアパートを自前の連絡センターとし、日本や欧州からベイルートに着いたら、そこに電話をすれば、日本人同士何日も待たされずに会えるということ自身が、私たちにとっては大きなことだった。

当面の財源も確保できたので、ハバシユ会議後、73年12月から74年1月くらいから、こうした場所の確保を行った。在欧の日本人、VZ58、IRF-ICなど、限られた仲間には番号を知らせ、ベイルートに着いたら電話連絡はしてよいことにする、という保安基準を作った。また、保安局と確認しつつ、3ヵ月に1回引越しをしながら、アパートの場所を確保した。71年日本を出発して、私がベイルートに住みはじめてからリッジ闘争までは、社会の窓口として、私のアパートをオープンにしていた。特派員や大使館の人も来たりしていたし、日本人社会と付き合ってきた。リッジ闘争後は、そのような場所として確保したわけではなかったが、横の連絡が自分たちの自由になった。

ハバシユ会議を経た日本人ボランティアの独立の活動の方向は、他のボランティア仲間やPFLP内のコマンドたちにも刺激を与えた。「アラブ赤軍」が独立したら、そこに加わりたいという者もいたし、また、自分たちも小さなグループを作って独立しようという動きも出てきた。こうしたいくつものことに直面しながら、

私たちはアラブに居て、アラブ連帯・パレスチナ連帯は各組織と共同しつづける。

しかし、日本人の組織は、自国の革命に責任を持つような闘い方を前提とするので、アラブ人の参加は受け入れないことにした。それは、「日本人個人はボランティアでよいが、組織としては日本の革命に責任を負うべきだ」というハバシユ議長の助言でもあった。また、私がアラブに来た時から日本の変革を放棄して来たわけではない。日本の仲間は逮捕や「連赤事件」で、コンタクトは失われていても、新しい仲間はいたし、日本、世界の革命は一つのことだったのだから。

2、反米闘争の時代

70年代の未だ初頭にあたるこの時期、国際的なベトナム反戦闘争は高揚しつづけていた。ベトナム人民の正当な反植民地闘争を支援し、米国内の反戦闘争も激化していた。68年以来のパリ和平会議も、政治交渉は、ベトナム側のイニシアチブが優り米軍の撤退を迫り、有利に進んでいた。

こうした時期、73年10月の第4次中東戦争の局地的な緊張は、いわゆる国際的な「石油危機」を招き、後の歴史から見ると、各国が産業構造を転換する引金となった。また、各国が石油を求めてアラブよりに動いたので、この中東戦争の教訓から資本主義諸国の足並みをそろえさせるために、キッシンジャーの提唱によって、国連をないがしろにしたG7の「先進国首脳会議」が始まっている。アメリカは、ニクソンの訪中、米中首脳会議からニクソン失脚まで、パリ和平会議の一方で、激しい北爆や南ベトナム村民を弾圧しつづけた。

しかし、結局73年には、米軍はベトナムから撤収を余儀なくされて、ベトナム和平協定が成立する。73年から74年は、アジア各地は中東戦争に連動し、政治の民主化と解放を求めて、激しい闘いの最中だった。74年初め、アジア訪問中の田中首相はアジア各地の反日デモの洗礼を受けていた。

これは、アジア、アラブのみならず、世界史的に見れば、ラテンアメリカ、アフリカでもそうだった。戦後、ヤルタ・ポツダム体制は、アメリカの反共戦略にもとづいて再編されてきた。反共反ソ戦略のもとで、「反共」の名で、強権弾圧する軍事政権をアメリカは支持した。そして、民主的人権の要求すら圧殺されてきた。こうしたひずみが各国支配層に対する政権打倒の闘いとして、60年代世界的に広がった。アメリカを後ろ楯とする腐敗した政権は、「反共」の名で人民を弾圧した。にもかかわらず、アメリカは腐敗ファシヨ政権に軍事財政的支援をつづけた。この米国のやり

方は、国際的な反米闘争を引き起こしたばかりか、ベトナム反戦を契機として、アメリカ国民自身を厭戦・反戦へ、そしてアメリカの社会的危機へと蝕んでいたものであった。

フィリピンでは、マルコス政権に反対した人民の闘いに戒厳令がしかれ、タイでも民主化が弾圧され、韓国は反共ファシヨのもとで、民主化を暴圧していた。中国では、毛沢東を立てつつ、批林整風などと林彪批判から文化革命への批判と、その「4人組」との攻防が激しさを増していたし、それらはアジアの毛沢東派、ラオス・タイ・マレーシア・フィリピン・インドネシア・カンボジアの革命解放勢力にも影響を与え始めていた。

アジアばかりかラテンアメリカの毛派にも影響を与えた。チリのアジェンデ政権は、国民の選挙によって正当に選ばれたながら、1973年9月ピノチェットの軍事クーデターによって圧殺された。

この事件は、米多国籍企業の利害のために米国大使館を司令部とした勢力によって、人民政権の転覆が行われたことを示していた。ラテンアメリカの反米闘争は、激しさを増し、また、アジェンデ政権を支持していたパレスチナ移民やチリの革命家もパレスチナに逃れてきた。ちょうど10月戦争の頃である。私たちは彼らから野蛮で血にまみれた拷問や虐殺の話涙と共に学んだ。

一方、日本でも、第4次中東戦争による石油危機から、米国の一辺倒の政治の転換が求められてきた。田中訪アジアの際に見られた反日デモや日本商品排斥運動などのように、日本の戦前の植民地支配に続くアジア経済進出への批判は、アジア各地でも広がっていた。日本ではアメリカに追随し、米国の利害と不可分な道を進んできた。日本は、アジア近隣諸国と敵対しているばかりか、日本とアメリカは当時アジア人民連帯のターゲットでもあった。

こうしたアジアの解放と革命の闘いは、60年代から70年代、各地で武装闘争を主要闘争形態として、激化していった時代である。

当時、世界各地の解放、革命運動は、ロシア革命以降、第二次大戦以前より続いていた習慣として、各地の有能なカードルをソ連、中国、東欧に派遣していた。また、職能、産別、学生、女性、平和団体などの国際連帯機構が世界の各国のそれらの層や職能別の国際組織をもって、連帯や交流の条件を作っていた。女性の組織は東ベルリンに、国際学生連合の組織はプラハに、といった具合に。米国の反共戦略に対抗して、こうした網の目のような国際連携の集団があった。

社会主義運動、解放革命運動のそれらは、各国の運

動のボランティア意志に支えられていた。そして、社会主義国が留学受け入れ、滞在無料などの条件で、連帯の流れを保障していた。チリなど、当時ラテンアメリカからの亡命者も多く居たので、こうした場合は、パレスチナ戦場同様、世界の闘う者同士の交流の場となった。

当時は、日本でもそうだったが、アジアにおける中国共産党の路線的影響力が大きかった。緊張緩和をめざすソ連よりも中国が、当時、武装闘争を進める反米民族解放闘争を支援しており、ベトナム支援でもソ連と中国の競合や矛盾が顕わになっていった。

ソ連は、平和共存を唱えて、各地の武装決起を選別的に支援していた。パレスチナに対しては、武器も訓練もPLOを中心に行っていた。それに比べると、中国は積極的に武装闘争を支援した。「国家は独立を求め、民族は解放を求め、人民は革命を求めろ」という毛沢東の時代認識に沿って、果敢に各国を支援した。そしてソ連との対立は、各地で広まっていた。

しかし、チリの反革命クーデターが起きた時とった

中国の態度は、以降のラテンアメリカにおける毛派の影響力を徐々に失わしめた。軍部のクーデターに対してアジェンデ大統領自らが銃を取り、防衛戦を強いられていた。多くの進歩的人材が虐殺される中、亡命を求めて、各国の大使館に逃れるチリ人を、多くの大使館は門戸を開放して助けた。キューバ大使館はその先頭で最善を尽くした。しかし中国大使館は本国の指示がないためか、助けようとしなかった。中国政府の態度は瞬間に世界に知れ渡った。「中国大使館の門前に亡命を求めた人々の死体が続いている」と。

ソ連がアジェンデ政権を支持していたこともあり、反革命クーデターのピノチェット政権を、中国は米国同様に認めて、外交関係を結んだ。

家族友人を殺され、難を逃れてペイルートに辿り着いたチリ人やパレスチナ移民の子どもにも当たる若者たちは、中国は味方ではないと断言していた。ピノチェットの拉致、拘束、虐殺に抗議すらせず、ピノチェットと手を組んだ中国の政府は許せないという思いだったのだろう。

由井りょう子著

情況新書 重信房子のいた時代

6月上旬発売！ 世界書院 1260円（税込み）

71年早春、重信房子は友人たちの前から忽然と姿を消した。ふたたび消息が知れたときには、「国際テロリスト」として恐れられていた。だが、その生い立ちは典型的な戦後日本のつつまじやかな家庭であり、まぶしいばかりの戦後民主主義のなかにあった。重信房子を育てた家族の愛と絆を読み解く。

著者からみれば、頼りになるきれいなおねえさんのひとりだった重信房子。高校時代の同級生は、詩や小説や草花が好きで、「貧乏な友だちのことばかり気にかけるシゲ」だったという。そんな彼女が、成長とともにどう変わっていったのか、あるいは変わらなかったのか。等身大の重信房子を描きながら、彼女の過ごした60年代、70年代、そして青春とは、家族とは、を問い、考える。

後記

たばこが品切れになりはじめて、本誌前号の「独居より」の3月16日の記述を思い出した。1967年初、重信さんが双葉町で選挙の手伝いをした話で、その中でこの地域がたばこの葉の生産地であることを知ったのである。双葉町は福島第一原発の地である。ちょうど福島からの避難家族がバッシングを受けた報道を聞きながら、今号の「独居より」の4月4日の「自責の念にとらわれず、住民こそ人災を怒り……」を入力していた。原発に関しては、快適な生活をしているぼくたちは被害者でもあるが加害者でもある。国・東電・先生方が“想定外”と濁すこと、ツケが国民に回されるだろうことは“想定内”だった。たばこは別にして、今度こそ変わろう。 Q

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル4階

救援連絡センター気付 「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

銀行口座 三井住友銀行 赤羽支店 226-3687269 オリーブの樹

頒布価格 500円

「正誤」表

第 105 号

- ① 6P(4/7)11～12 行目
- ② 8P(4/14)上から 17 行目
- ③ 10P(4/27)上から 20 行目
- ④ 18P上から 14 行目

齊壇→祭壇

ショウショウバカマ→ショウジョウバカマ

新見→新所見

ザール→ニザール